

ドイツ文学わき道散歩(14)

咲き始めの薔薇に、秋の気配が漂う。今を遡ること250年、薔薇の花を偏愛したマリー・アントワネットは、秋薔薇の美しい季節に生まれ、同じ季節に断頭台の露と消えた。「パンが無いならお菓子を食えば良いじゃないの」という冗談のようなセリフは大真面目に吐かれたものだが、民衆の怒りを増大させた数々の逸話の中には、品種改良のための2000人の庭師や、「薔薇の部屋」など、薔薇に関する贅沢三昧のエピソードが多く見られる。この花は古くより、エジプト女王クレオパトラやローマ皇帝ネロなど、権勢を誇る人々を夢中にさせてきた。アントワネットの運命を決定づけたフランス革命の後、皇帝ナポレオン・ボナパルトの妃として贅を尽くしたジョゼフィーヌもまたその虜となった女性である。マルメゾンでの250種もの薔薇に囲まれた生活、マリー・アントワネットと同じく薔薇の画家P. J. ルドゥーテを庇護したことなど、薔薇にまつわる話が残る。

そして、規模は全く異なるものの、薔薇に魅せられた有名人とさえ、忘れてならないのが詩人ライナー・マリア・リルケである。リルケは19世紀末から20世紀初頭にかけて感性豊かな美しい詩を書いた抒情詩人として知られているが、彼の詩作の醍醐味は、自己の内面を見つめた神学的・哲学的な深みを持つ晩年の作品にあると言えよう。ロシア旅行で得た内的体験やフランス象徴派の影響が、この感性の詩人リルケの中で昇華されその詩風を変えても、ずっと彼の詩心を捉えて離さなかったのは薔薇である。時に咲きこぼれ、時に象徴的に佇む。リルケは折りに触れては薔薇を詠み、それはなまめかしいほどに匂い立つ存在感を生んだ。晩年の名作『オルフォイスに寄せるソネット』でも、詩神オルフォイスを薔薇の花に重ねて美しく謳い上げている。

詩人の最期は、まるで彼の描いた詩中の出来事のように訪れた。リルケはこよなく愛した薔薇の棘で刺した傷がもとでこの世を去っているのである。遺言書で指定した自身の墓碑銘は、今日最も知られているリルケの詩なのかも知れない。

薔薇よ、おゝ純粹なる矛盾
かくもあまたの臉の下で
なんびとのものでもなき眠りのよるこびよ

運命は、スイスのラロンに眠るリルケを薔薇の詩人として人々の心に焼き付けている。

ところで遺言で有名な文人と言え、*「石見人森林太郎として死せんと欲」*した明治の文豪を思い出す人も多いのではなからうか。ドイツとは深い縁あるこの人物の話は、また次の機会まで眠らせておくことにしよう。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり